うたそら

2026.
November
No.35

Utasora

参加者一覧 …… 02

連作欄 8首の連作 自由詠 …… 03

テーマ詠欄 「静」 …… 11

一首評 「そらよみ」 …… 14

短歌リレーコラム 「望遠鏡」 …… 16

リレーエッセイ 「いちごいちえ」 …… 18

次回予告・編集後記 …… 19

うたそう

ご参加いただいた
みなさん（五十音順）

2026. November
No. 35

織部ゆい　@yui_oribe
歌島孟　@Sinn1990
片羽雲雀　@anju92091554
涸れ井戸　@kaionjjoe
河原こいし　@_little_word_
キキキキウ　@meinalltag_
北乃銀猫　@Silbernekatze_
北谷雪　@kitaya_misomiso
橘高なつめ　@coconutkikko
くろだたけし　@tkuro2016
坂口栞
澁谷幸司　@kainohi1
須藤純貴　@junki_poem
砂山ふうり
多香子

藍沢空　@sky_indigoblau
麻倉ゆえ　@AsakuraYue
井倉りつ　@uta_litz
石川順一　@Hitler57
宇祖田都子　@shinnsyutu2020
泳二　@Ejshimada
千井さき　@chii57577
千原こはぎ　@kohagi_tw
中村成志　@nakam8
七澤銀河　@Ginga_Nanasawa
西淳子　@Jacky244Ray
埜中なの　@nanoTANKA
薄荷。　@aieOhimeco
非常口ドット　@hijyouguchi_dot
廣珍堂　@Hirochin_dos
福山桃歌　@momoka_fukuyama
古井　朔　@saku_furui
真岡　まな　@mao_or_mana
御糸さち　@MEATsachi
水上歌眠　@kamin_plz
南の島　@_nrknnm
みはうひたき　@osyoyuu
宮岡 りょう　@myao_rrr
宮嶋いつく　@miyazima_izq
杜崎アオ　@morisaki_ao
森内詩紋　@NJq4oEyg5gIcRpu

計41名

たくさんのご参加
ありがとうございます！

連作欄

8首の連作 自由詠

#うたそう

Emptiness

井倉りつ

ふたりだとだめになっちゃう　離れてるほうが捗るタームってある
がらんどう　渡せなかった花束をほどいてぜんぶ逆さに吊るす
今ここにいなくてももういなくても「いたことがある」だけで生きてく
仲直りできてないまま鳴り響く緊急地震速報、あのね、
息を吸って吐いてゆっくり目を開けて　もう手放しても大丈夫だよ
夜病むの飽きて部屋から出てみたら花の写真を撮るような朝
恋人になる前と後と恋人じゃなくなった後のそのあとの今
そこにいる限りあなたはしあわせになれませんよとGeminiうるさい

「運動会の日に」

石川順一

ヒトラーはムッソリーニを尊敬し御菓子の後にコーヒーを飲む
トイレでは扇風機回る秋日和ノートから落ちる下敷き白し
コリウスの穂花が咲きぬ人生の延長戦を許さぬ青空
ピクニックイギリス民謡二階から微かに聞こえイヴェント終わる
通り雨スヌーピーの住む家の鉛筆削り機風を疑ふ
ごみ捨てるためにたくさんメモをする靴下濡れる雨を嫌悪し
階段を昇りて降りる足元は妖怪じみて犬が鳴き出す
ドーナツは小さきが良しゴミ箱のピノキオの穿くズボンは赤し

屋上獏部35　ネタバレ

宇祖田都子

直角に光る手摺が錆びかけるポテトサラダは残さず食べる
口笛を人質にとる犯人の横にはマネキンが立っている
屋上で逆立ちをするこの星の体重分を支えるための
ドーナツの巨大な穴を取り囲み1・2・3でゆっくり落ちる
とんがってると痛いから屋上でもう頬杖をつかないであげて
屋上がパスタの皿に見えるほど無限に長いあやとりをした
真夜中の雨で電話が混線しみんなネタバレされてたらしい
旧校舎屋上で欠伸をしてる人が幻だって知ってた

古事記のをみなになるワタシ

歌島孟

大岩を隔てて別れ宣るときも汝(なれ)より語れ、吾(あ)を恋ふならば
みずら結う姫の凛々しき横顔はじゃじゃ馬なれる汝兄(なせ)を見咎む
負け知らぬ私の顔にひれ伏さぬナマコの口は斬ってやろうか
君のふと吐いたクソデカため息の理由(わけ)聞く声が喉に詰まって
行く末は暗く火群と燃ゆる血を分けたふたりで生きてゆきたい
ほら月が出てきましたよ。抱くだけが愛じゃないのと知ってほしくて
海風へ怒りをのせて捨ててゆく草はあなたのために摘んだの
うら若き少女になれる、召さむぞと言われた時を思い起こせば

疼痛

片羽雲雀

だいじょうぶ冷たい風を抱きしめて土曜の夜のバスは揺り籠
いいかげん答え探しに飽きた頃オセロの黒が瞼を閉じる
すき鋏持つ手を見つめ留まれば君と過ごした時間が痛む
キスの数かぞえることをやめてから埃をかぶるワインの香り
なさけない泣き顔隠す月のない夜とテキーラ優しく撫でて
きしむ音聞こえぬふりでマーシャルに繋ぐギターと重ねる叫び
みなしごに似た眼差しを受け止めるピエタになれぬ足りない煙草
へし折ったビニール傘を身代わりに羽を集めて飛び立つ準備

去年もマリオ

涸れ井戸

書くための静寂という催しが月二回ある京都のカフェで
一か月京都にステイ・創作をする催しと連動してる
多国からアーティストらが集結し京都のカフェの静寂となる
東京の南田偵一さんも来て共にFABCAFEの静寂へと
カティさんは満面の笑みで挨拶を静寂の場に点く秋灯り
もくもくと雲が生まれて遠くから月が照らして未生の時間
くらやみの路地縫ってくてく帰るバッグの中のポメラが重い
地下通路マリオの壁画見やりつつ去年もこれだったな～と思う

ハウス

河原こいし

「ご実家は？」が場所を尋ねる問いであれ「もうありません」と笑顔で返す
野の花や雑草のようわたくしの個を見ずあなたは娘と呼んだ
おばあちゃんだけは好きって言えぬまま祖母はかわいく呆けてしまった
土地を買うここにわたしの家が建つ更地に咲いたたんぽぽを踏む
「お子様のご予定は？」という問いかけに舌打ちしかけた口で微笑む
当然のように「子供はいりません」二人と一匹だけの平穏
父親に似た眉を抜き推し色のシャドウを塗ってわたしを創る
漆黒を眉マスカラで塗り替える遺伝の終わりはミルクティー色

空白の湿度

キキキキウ

冬の朝誰も触れない窓硝子昨日の電話がまだ冷えている
雪になるはずだった雨降り続きもう言えないこと湿らせている
アイシテル深度を測る夜更けには時計の針さえ呼吸を止める
古本のページに枯れ葉ただ一枚誰かの季節を終わらせた色
いつの間に恋人の日に成り下がるクリスマスに欠く君と左手
冬空に鳥のかたちの空白がひとつ残ってまた消えた昼
春を待つなんて言葉はまだ薄いネオンに負けない私になれない
ハイヒール折れた先から降り積もる古い約束買い直すだけ

I'm lost.

北乃銀猫

ああそういうことだったんだ気づかずにいたのはわたしだけだったんだ
痛くても泣いたことないでもいまは胸が苦しいこの感情は
もしかして悲しいのかもきれいだねいつもと同じ夕陽なのにね
ゆっくりとでも着実に落ちてゆく水平線の夕陽に緩む
断ってくれてた方がマシだったデートしてから「ごめん」か　そうか
綱渡り境界線を歩いてる揺れているのも選択のうち
いつまでもいつか会えると信じてていつかは決してないと気づいた
好きな人の好きな人になれないと悟る星空納得させて

センチメンタル・ソテー

橘高なつめ

週末のたびに泊まって酢を入れたフレンチトースト作らせる奴
太陽のような卵を2個焼いてセンチメンタル・ソテーと名付けた
トーストの香りに頬をゆるませる冬という名の猫になりたい
「卵もさ値上がりしたし私達そろそろ別れよう」といきなり
夕焼けに溺れかけてるいつまでも鳴りやまぬ午後5時の心臓
モザイクのようねあなたが見る夢は小さなひびを張り巡らせて
冷めたけど美味しいねって嘘をつく夜の隣でくしゃみしながら
日に焼けた優しい色のフォトグラフ焦げつく前に出ていってくれ

システムに脆弱性が見つかりました

くろだたけし

空じゅうを「ＥＲＲＯＲ」の文字が埋め尽くしコンビニに塩むすびしかない
だらしなく漏れてしまった情報が分身となり街をうろつく
つかもうとして取り落とす人間のために頑丈なスマートフォン
雨の中高く響いた鈴の音をみんな自分の答えと思った
笑わずに聞いてくれって告白をしたあとの彼女の無表情
エーアイの予想進路が台風を導いてゆく　次のフェーズへ
知っていることの向こうの未知の海　ときどきは呆然としなさい
足で踏む風の力で鳴っていたあのオルガンを聴いた空耳

嵐が丘

澁谷幸司

荒野辺を　駆けし幼き　ふたりには　風も大地も　わが物なりき
ひとつ身と　思ひしほどに　荒野辺の　風も心も　ひとつなりけり
愛しさを　胸に抱きつつ　キャサリンは　別なる道を　選びて去りぬ
ヒスクリフ　愛しきひとを　失ひて　憎悪の裡に　愛こそありける
窓辺より　荒野を求む　呼ぶ声に　応ふるものは　風ばかりなり
墓標にぞ　並びしふたつの　名は残り　愛憎さへも　大地に眠る
憎しみの　鎖を断ちて　若きふたり　荒野の丘に　春を招けり
荒野吹く　風はむかしと　変はらねど　ふたりの御霊　今ぞ安らふ

Ｓ（UNAYAMA）Ｆ まち

砂山ふうり

がんばっているところではいつだってカレーライスが輝いている
現金な奴だときみは言うけれどもう俺はもう仮想通貨だ
綿あめのような灯りが浮いていて少し乱視も悪くない夜
雨後の樹に光は充ちてこの辺りパワースポットになりたがってる
蒂をとり苺に牛乳かけるとき一つ一つが母として浮く
中秋の肢別問題集を閉じ背すじ伸ばせば名月は○
ＡＩに褒められながら生きるのも悪くないわと鏡の女王
海カフェのスパゲッティーをこの旅のエンドロールにして巻き上げる

帰り花

多香子

このところ気持ちが浮つく午後があり私も帰り花になれるか
どうしたらいいのだろうと立ち止まる丁字路の恋に落ちた二人は
秋風が二度とない人と論してる筋肉質なあなたの背中
秋雨の降る日のふとんの真ん中が猫の形にちいさく沈む
薔薇の芽は深く深紅に伸びゆきて秋の窓辺はさやけくてあり
洗濯機まわるまわるよその内にも時代の変わる世に生きている
秋深く空き地も増えて赤トンボ鉄条網に並んであくび
お気に入りカナリア色のカーディガン寒風の中でも歌っていたい

super express

千原こはぎ

夢すぎて叶うと思わなかったこと叶えるために乗ってる電車
晴れやかに過ぎゆく景色を遮ってトンネルはくる不安みたいに
忘れ物たぶんしている気がしてる　気がしなかったことはないけど
思うより暴力的なスピードで新幹線は秋を切り裂く
ニュースの中だけの地名を走ってる　遠く遠くに待つひとがいる
緊張をしているはずはないけれどそれはさておきお腹が痛い
あとすこししたら着くはず充電の増えないスマホのコードを片す
その先であなたはきっと笑ってる　着いてもなかなかひらかないドア

マイルズのトランペット

中村成志

干したてのパジャマが肌に馴染むころ秋雨一区切りのにおいして
短命の星と終わるもオリオンの右肩いまだ薄明のなか
絵本みたいな頭の尖っている桃を見つけるための旅としようか
土道に目を眇めればくろぐろと逢魔が刻へ浮くまんじゅしゃげ
何が建っていたっけ生の土の香に物干し竿が並べ置かれて
足爪を切るにともなう前傾ののちの目眩のひと時、音無し
マイルズのトランペットの耳障り噛み砕かれるにはまずうなじから
立てられるだけ指を立てともかくも生きてるんだって伝えませんか

インディゴの虹

七澤銀河

立ち枯れた花のようだね雨の日に色を落として煙るビル街
懐かない猫と思えば愛おしい気紛れだけが取り柄の君も
夕暮れの給水タンクで上目からおかえりと鳴く黒い雄猫
痛ましい象の未来が視えた午後　青い林檎で引き寄せる鼻
つるし柿みたいにひとり立ち尽くす下校のベルが鳴る方を見て
幸運を引き連れて翔ぶ鳩の群れ　夫婦喧嘩はまだ続いてる
17時、下校の鐘があふれ出す僕が戻れる部屋はないのに
歌う波揺り返す町この星が探しつづけるインディゴの虹

いつのまに

廣珍堂

ＳＮＳ投稿履歴を審査して地球の皮を剥いだＡＩ
どんどんと小さく少なくなる菓子を落としてしまい見つけられない
リポストがリポストされて細くなりカンダダが切る糸となるらし
カワハギの皮が剥がれて肌怪し酔っ払いたち海へと誘い
日本海溝へと沈むプレートが預かっている遺言騒ぐ
独身の男は布団へ娘息子犬猫妻が入る夢を
いつのまに白味噌雑煮となりたるや雪国生まれのやや京都人
処方されしレイプドラッグ半錠に注意喚起の真っ青を見る

花の名前

福山桃歌

読みかけの本を開いてみたくなる金木犀が庭に香れば
つめたい手　このままずっと何ひとつ掴めないまま終わるのだとして
ふくらんだ冬毛に絡む枯れ草に二匹の猫は仲睦まじく
返り血を浴びて笑ったあなたなら間違いだって正しさにする
幸福は触れてしまった夜のこと触れられてしまった夜のこと
輪郭がぼんやり揺れて見失う橙色の灯りのもとで
泣きながら眠って起きる薄明の苦しいくらいあなたのことだ
どう言えば伝わるだろうあなたからいくつも花の名前を教わり

帰り道

薄荷。

むかし見たマティスの青い絵のように若者たちが踊る駅前
及第点くらいの笑顔をつくろえば街の景色のひとつになれる
足音に置いていかれる気がしてる（ヒールシューズはまだ履きなれない）
靴底がそれぞれの声で歌うからこの世界中ぜんぶ音楽
八分の三拍子で行く猫の背を見送って淡い午後の陽だまり
老犬は詩人のような顔をして乾いた落ち葉を踏みしめ歩く
別れ際ハイタッチしたきみの手の温度をおもいだす帰り道
来た道をそのままなぞる（きみと見たフランス映画みたいな夕暮れ）

十月は黒色

非常口ドット

ＡＩが容易く奪う生活と人が必死に守る生活
怪物はまっくろけっけの手を延ばす掴まれていない手などはない
まるでもう役目を終えたダムひびが入りすぎれば水は止まらず
錠前を朝に作って夜に替えそうか塹壕の中で生きてる
痛覚も鈍くなるのかつま先を踏まれてもすぐ歩けてしまう
ドヤ顔で安全を売る詐欺師ども数十年後に何を思うか
醜くて卑しくて良い倒れれば破れてしまう家庭の扉
世界的パンデミックは乗り越えた大丈夫だよ次も越せるさ

ごめんね

御糸さち

会う前に散髪をする必要がある友人とない友人と
アプリから予約をすればポイントがたまる（どうして?）サロンを探す
快適と機械的とは似ているね　まひる　電車に運ばれながら
頭皮凝ってますねと言われ頭皮って凝るんですかと聞き返している
五千円払って痛い思いして四ヶ月ぶりに生き返る眉
半分はマスクに隠す前提で　誰も私を見ぬ前提で
友達が名古屋にもいてそれぞれが私にくれるそれぞれの味噌
会ったことある人にはじめましてって言ったのに笑い飛ばされて　へへ

テーマソング

水上歌眠

何のために生きる?とわたしに問いかけてだんだん顔の欠けるヒーロー
からっぽになった勇気を引きずって１００％の魔法を待った
酸性雨を習ったころに潜ませたナイフ・ランプのしずかな重み
なりたいな、ならなくちゃの後なんだっけマサラタウンのサトシ十歳
地元なんもないよと笑う。いつまでも校歌のなかにそびえたつ山
何にかはわからないけど負けないで　誰の／何のＣＭだった?
なくす歌　みつける歌　さがす歌　雨にだんだん溶けてゆく歌
金木犀の季節に生きて歌詞のないテーマソングをいつか持つだろう

転職のメリークリスマス

南の島

食卓の端の薬が減るように今日のやること押し出してのむ
役職もないのに相談してくれた同期は他社に内定し迷う
本当はいなくなったら無理なのに今日も背中を押してしまった
引き留めに合わなかったと話す君それは尊重したいからだよ
話してくれたから話すとわたしもねわたしの荷物をちょっと持ってね
好きな人の好きな人に必要な人の必要な人になりたい
クリスマスケーキ早割古紙に出す師走の自分なんて見えない
嫌な思いしてほしくない今言える最大限の愛をまっすぐ

連作欄
8首の連作
自由詠

令和八年九月末頃

みはうひたき

向かいあう主治医、母、我　おだやかな水面なかなか沈まない舟
テーブルの硬さ筆圧渡されたぼくのものではないボールペン
署名する「罪のいしきに似たトーン」みんな自分のために生きてる
つつがなく秋のはじまり人生の経験ビンゴ「喪主」に穴開く
寝た父の二度と震えることのない声帯　私と似た声の父
斎場の二階の奥の喫煙所　他家(よそ)のだれかの光るIQOS
骨は骨　生身は生身　夏おわる　わたしの湖(うみ)に透明な父
死んだのに骨壺なのに別れ際「元気でな」って言いそうになる

夜明けの皇女

宮嶋いつく

漸漸と拡がる光身にまとい眼前に立つ夜明けの皇女
東雲を染めて滴る紅をくちびるに差す夜明けの皇女
曙の色　薄紅のアイライン　清らを纏う夜明けの皇女
悪しき夢燃やす東の茜雲覚めよ夜明けの皇女とともに
夜を濯ぐ禊の露で身を洗い今日を言祝ぐ夜明けの皇女
黎明の蒼い光が先達し高みへ昇る夜明けの皇女
朝靄の御簾を揚げ夜明けの皇女光を求む者に目を向け
払暁に夜明けの皇女降り立って明ける世界の幸福祈る

ぬばたまの、

森内詩紋

なんとなく離れがたくて口にだす「写真を撮りに行くんですけど……」
多忙でも時間をくれるひとであり、つまりは甘やかされているのだ
面倒な客と電話をしていてもあなたは声に決して出さない
刈田風ばかりをのせて去っていく二両の汽車の窓の明るさ
まだ秋のにおいが少し残ってる無人駅から半月を見る
一晩中ここだけ光っているんだな電話ボックスはアジールめいて
ぬばたまの闇に溶けゆく輪郭のあなたをどうかもう1ショット
刻々と闇は深まる次会える日は凩が吹くのだろうな



テーマ詠「静」

栄光を運んだ船の残骸は静かの海に取り残されて　◆藍沢空
川辺から春はウグイス夏はセミ秋は虫たち冬は静けさ　◆麻倉ゆえ
質問に答えてよ　言葉にしてよ　黙らないでよ　目を合わせてよ　◆井倉りつ
芋虫は何時も静まる雰囲気で金木犀の葉を食べ尽くし　◆石川順一
夢に降る雨がほんとに降っている朝は静かに歩みをとめる　◆宇祖田都子
僕たちは月に土足で降り立ってそこを静かの海と名付けた　◆泳二
朝ぼらけゴッと扉に手をかける体育館に響くおはよう　◆織部ゆい
静岡の遠州灘に吹き荒れる風に皐月の凧舞いあがる　◆歌島孟
悲しみも怒りもカメラロールさえ色褪せてゆく名付けず埋める　◆片羽雲雀
ジャズならばＢＧＭとして静か原稿用紙おごそかに出す　◆凪れ井戸
無花果のジャムをあなたが煮込む日のしずかな秋の空気がきれい　◆河原こいし

静謐の地層に埋めた言葉ごと君を知らない冬になりたい

静かな海が行けないところにあるなんて知らない頃は素直だったよ

叔父はまた煙草を呑んだ一瞥もくれずにダウト、と静かに言って

静謐な密度と弾力兼ね備えメロンゼリーは鎮座ましまします

静夜なる　月を仰ぎて　面影の　想ひびとこそ　いづくにゐめれ

誰一人何も言わずに気配消し教師の視線だけ動く部屋

はつゆきと共に近づく静けさに傾ぐシーソーひとっこひとり

一滴の波紋も起こらなくて凪　あなたは過去の抽斗のなか

たまごの香しずのおだまき小田原の今は昔のひとつ舞いませ

北風のまにまに揺れて口づけるそっといのちを閉じた世界で

「ただいま」とドアを開ければ静寂が子犬のように飛びついてくる

お人形の深い海色（みいろ）の双の眼に閉じ込められて静物われは

◆キキキキウ

◆北乃銀猫

◆北谷雪

◆坂口栞

◆澁谷幸司

◆須藤純貴

◆千井さき

◆千原こはぎ

◆中村成志

◆七澤銀河

◆西淳子

◆埜中なの



それぞれがページをめくる音だけで飾られている午後の図書館

秋草の匂ひを纏ひひとりきり山道ゆけば水静かなり

イヤホンを忘れた朝のいつもより静かなホーム各停を待つ

その波は静かの海まで届きたり痛み分けあう片割れの月

一面の白い世界に舞い降りる無数の白の落下点

ほかほかの六年生がおふとんにくるまっていてしずかな土曜

お菓子作りピアノお稽古バイオリン宿題お風呂みんなのヒロイン

もう少しあるいた先に海が待つ　用宗港にかかる薄月

虫の音が止んでまことの静けさが鼓膜に残るつごもりの夜

ひとりではないとゆうこと手をつなぐみたいに静止衛星ひかる

静々（しずしず）とおうし座北流星群にあなたが無敵であるよう祈る

◆薄荷。

◆廣珍堂

◆福山桃歌

◆古井　朔

◆真岡　まな

◆御糸さち

◆南の島

◆宮岡 りょう

◆宮嶋いつく

◆杜崎アオ

◆森内詩紋

一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から
気になった一首をとりあげて
200文字くらいで語る
一首評のコーナーです

ひび割れた眼鏡がはじく雨粒のひとつひとつにあなたは暮らす

橘高なつめ

美しい記憶は心の中で拡大されて行く。その、拡大された思い出を覗き込む時、忘れてしまいたいことだけがなおさらのように心に大きな比重を占めて行く。それは時に辛く悲しいことだとしても、記憶の痛みをバネにしなければ進めない未来がある。そんな切ない心情は、「ひび割れた眼鏡」を通してさらに熱を帯びて行く。

高温多湿なのに、どこかさらっとした感触を後に残す歌である。

一首評　七澤銀河

金槌も飾られている本棚に図面の青い直線ねむる

高野蒔

本棚にインテリアを置くのはよくあるが、金槌というのは意表を突いて面白い。図面、それも「青い」とあるので昔ながらの青焼きコピーか。昨今ではディスプレイか、紙でも黒字の再生紙が一般と聞く。ベテラン建築士の、思い出の資料が並べられているのだろうか。深読みになるが、もう故人となった専門家の本棚を、家族か後進の者が感慨をもって眺めているのかもしれない。

派手ではないが静かで、想像をさせる一首。

一首評　中村成志

しめじより松茸よりも舞茸が好きな二人の炊き込みご飯

多香子

共感度100％でした。リズムが心地よく素直に詠まれていて味わい深い。ほっこりする。「二人の」が効いている。幸せそうなお二人の炊き込みご飯が食べたくなりました。

「見つけたら舞い上がるほど嬉しいから舞茸」と名付けられたと聞いたことがあります。なるほど。この炊き込みご飯の歌を見つけたときは楽しかった。

一首評　砂山ふらり

「そらよみ」一首評募集

ご投稿はこちらの
投稿フォームから！

前号の「うたそら」からあなたのお気に入りの一首を引用し、
その歌について200文字以内でお書きください。
お一人につき一首まで。
ご自分の短歌ではなく、他の方の作品でお願いいたします。
公序良俗に反するもの、作者や他人の人格を傷つけるような
投稿は掲載できませんのでご注意ください。

内側に深く燃えつづけるひとがまだいて真夏　乾ききれない

千原こはぎ

深く燃えつづけるのは、あの人を取り巻く景色や物もふくめた思い出だろう。真夏の暑さが生ぬるいと思えるほど、あの人の　俤は心の中で光り輝いている。心の支えではなく鎖のようになってしまった彼の影を手放すためには、イカロスが目指した太陽のように、自分という存在を焼き尽くしてしまう、そこはかとない何かが必要なのかもしれない。連作の中では、過去への未練とともに精神の危うさを醸しだした、この歌に強く惹かれました。

一首評　歌島孟

自転車のからから鳴ってどの夏もこの夏にいる、気配でわかる

水上　歌眠

里帰りだろうか。シャッター商店街の色鉛筆専門店、取りきれずに残る蜂の巣、浅く沈むようにそこにある訃報の切り抜き。どこか影があり、それでいて誰の記憶に差し込まれても違和感がないような、断片たちが魅力的な連作だ。引いたのは六首目。季節に身を置いてデジャ・ヴのように記憶が呼び起こされることは珍しくないが、「どの夏もこの夏にいる」という端正な表現が光る。今この時が淡く内包する過去の時間に思いを馳せたい。

一首評　北谷雪

デコポンの出っ張りに似た憂鬱をみじん切りする落日の窓

柿﨑薫

子どものころ、デコポンの出っ張りにはなんとなく近づきたくないと思っていたことを思い出した。すぼめた唇のような皺皺は、グロテスクで禍々しい。見てはいけないものが晒されている感じもする。一つとして同じでない不安定な出っ張りを憂鬱のかたちと音で刻まれるリズムや、落日の窓辺で行われるみじん切りが、どこか地獄めいていて美しい。憂鬱でも生活は続く実感がある。

一首評　南の島

吐き棄てられた言葉の溜まるゆふぐれは電信柱を迂回してゆく

tankalife

吐き棄てられた言葉が主体の中に溜まって意識が散漫になってしまうから、注意して歩こうと思って電信柱を迂回するのか。それとも、街ゆく人々が吐き棄てた言葉がつむじ風のようにからまって電信柱のたもとに溜まっているから迂回してゆくのか。

旧字体ならば後者の雰囲気だ。「捨てる」ではなく「棄てる」であるところも、旧字と相まってハードボイルドでかっこいい。

一首評　埜中なの



短歌リレーコラム

望遠鏡 35

短歌にまつわるあれこれについて自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

書き手　渓　響

テーマ　「美学ミーム」という補助線？

サブカルチャーの世界に、「美学ミーム」（インターネット美学）と呼ばれる概念群がある。明確な定義こそし難いながら、ある種の感情や世界観に対して、「こういう感覚ってあるな」と思わせる表現が、画像や音楽、ファッションなどを通じて共有され、インターネットの拡散力も手伝ってひとつの概念として定着していく現象である。

代表的な例が「リミナルスペース」である。駅のホーム、ホテル、ショッピングモールなど、本来は人がいるはずの場所に誰もいない。そんな光景を見たときの、不気味さと郷愁が入り混じった感覚。もとは「ある場所から別の場所へ移る途中の空間」として階段や廊下を意味する建築の用語だったものが、ネット上では拡張して使われている。近年話題の映画『8番出口』『バックルームズ』はどちらもこのリミナルな美意識を反映した作品で、映画をきっかけにこの語を知った人も多いだろう。

今回は、この美学ミームを補助線にしていくつか短歌を読んでみたい。用語にはなるべく説明を添えていくが、ミームの性質上、文章だけでは伝えきれない感覚的な要素が多分に含まれている。つかみにくい部分があれば、登場する用語を画像検索してみると早い。用語を体系的に整理したサイトに「美学ウィキ」、YouTube チャンネルには「ゆっくり core 解説」がある。書籍では、廣田龍平『ネット怪談の民俗学』（早川書房）や、Alt236 著・佐野ゆか訳『リミナルスペース 新しい恐怖の美学』（フィルムアート社）が読み物として参考になる。

産む性でも産まない性でもなくて産まれない性のまま背泳ぎ
おそろしいことだね精神年齢がプールバッグを手放さないのは
／砂崎柊「虹を脱走した色たちへ」vol.13『ねむらない樹』

第八回笹井宏之賞の受賞作から引いた。初読時、わたしはなんといっても連作の「リミナル」な感触と、それに付随するどことない不気味さや郷愁を作品の魅力として読んだ。

砂崎の連作は、「プール」というモチーフで一貫している。そこで思い出されるのが、リミナルスペースとも親和性の高い美学ミームのひとつ「プールコア」（Poolcore）だ。誰もいないプールを想像してみる。水の反響音、妙にきれいなタイル、使われていないウォータースライダー。人の営みから切り離されてみると、プールは途端に異質な空間へと変わる。プールコアは、そうしたプールという場の独特の手ざわりを、写真や映像を通じて共有してきた美学である。

砂崎の連作をプールコアと結びつけるのは、単にプールが題材だからというのではない。重要なのは、「リミナル」という語の意味する〝境界性〟である。掲出の二首にも表れているが、この連作はカテゴリや数字に基づく既存の分類に自分を位置づけようとせず、その境界の領域に居ようとする態度で一貫している。分類のあわい、「境界」にとどまろうとする感触が、プールという空間の持っているリミナルな質感と響き合うのだ。

フル・ビジョンのエラー・ブルーに一心を染めて禅とは心の名前
さまざまな型のテレビは映し出す　すべてが同じ初夏のフィヨルド
／山本仮名「S・U・M・M・E・R」『短歌』二〇二五年一〇月号

山本の連作は、ヴェイパーウェイブ的な質感を自覚的に取り入れた作品であり、美学ミームと短歌の結びつきを考えるうえで重要な先行例である。ヴェイパーウェイブとは、八〇〜九〇年代の消費社会やヤッピー文化を想起させつつ、当時の社会へのノスタルジーや皮肉を再構成する美学だ。

ヴェイパーウェイブを前景化させようとすると、長い横文字が頻発し、韻律や視覚的な印象が緩みやすい点が技術的には難しいところだが、山本はそうした語彙を使いこなしている。短歌定型と、現代的でクールなモチーフとのバランス感覚が秀逸な作者だとつくづく思う。

掲出一首目、「禅」のイメージはしばしばテクノロジーの文脈と結びついてきた。たとえばプログラミング言語 Python のコーディング原則は「The Zen of Python」と称される。美学ミームにも禅を語源とする用語がある。「テクノゼン」（Technozen）である。これは、Wii や ASIMO に象徴される、ゼロ年代の日本的なテクノロジーの美意識を指摘したものである。当時なりの近未来へのときめきを感じさせつつ、シンプルで愛らしく、居心地がよい。エラー・ブルーの画面も、真っ青な画面に白い文字という、極端なほどシンプルに洗練された画面である。文脈を踏まえてみると、「禅」というモチーフに味わいが出てくるだろう。

掲出二首目からは、家電量販店などに大量に陳列されたテレビが、同じ映像を一斉に映し出している光景を想起させられる。フィヨルドの景色は、空と海、山肌の色彩にあふれ、テレビの映写能力を示すのにうってつけなのだろう。同じ映像が何台ものテレビで反復され、フィヨルドの美しい風景が際限なく消費されていく。これはまさに、ヴェイパーウェイブ的な美意識なのである。

シャンプー　僕が自殺をして君が二周目を生きるのはどうだろう
／青松輝『4』

最後に青松のこの歌を取り上げたい。今年の歌壇で盛り上がった「意味／テクスチャ」の議論でも、たびたび俎上に載せられてきた一首である。やはり気になるのは、初句に一字空けで置かれた「シャンプー」という名詞の効果である。

この語から、美学ミーム好きが思い浮かべるのは、「クリーンコア」（Cleancore）だろう。洗剤や石鹸、シャワーなど、汚れを落とすものや清潔さを思わせるアイテムを中心にした美学で、シャンプーもこの範囲に入る。興味深いのは、この美学が性質の異なる二つの流れを含むと指摘されていることだ。ひとつは「ロー・クリンコア」で、ゴムのアヒルやカラフルなスポンジなど、幼少期の入浴における無邪気な記憶と結びつく。もうひとつが「ハイ・クリーンコア」で、洗剤や薬品などのアイテムを通じて、衛生や無菌性を強調する。

では、「シャンプー」がクリーンコア的な印象を呼び込むとして、二句以降はどう読めるだろうか。「ロー」の側から読めば、「二周目を生きるのはどうか」という発想は無邪気で、ある種退行のようにも見える。「ハイ」の側から読めば、身体を管理しようとするような、過剰な潔癖さを連想する。どちらの印象を受け取っても、〈自殺〉という語は極端に危なっかしいのだが、その危うさの質は読みのモードによって異なってくる。〈シャンプー〉を考えるうえで、この二面性は重要な視点と言えよう。

私は美学ミームが大好きだ。言語化しきれない「感性」の領域に、学術用語かのような名前が与えられ、それらしく論じられる。しかし、感覚をすぐにロジックへ当てはめるような、いわば衒学的な態度は、短歌の鑑賞に必ずしも適さない。はっきり説明できる部分と、どうしても言い表せない直感。その両者のあわいを言語化することにこそ、鑑賞者の仕事があるからだ。

とはいえ、いまの若い世代にとって、美学ミームは単なる用語集にとどまらないのも事実だろう。近年は美学ミームのなかの概念自体の知名度も上がっている。ネットに親しんで育った平成生まれの世代にとっては意識的にせよ無意識的にせよ、美学ミーム的な美意識を内面化してる可能性が高い。「なぜこのモチーフが出てくるのか」と戸惑ったときに、美学ミームを参照してみると、思わぬ補助線になることがあるかもしれない。

リレーエッセイ 35

いちごいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んで
それをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ　耳をすます
書き手　樒倉

私はその時耳をすましました。七月下旬のこと。大学の実習でとある山間地域に行くことになりました。私の所属は農学部です。虫が好きな奴らが多い。実習の集合時間は昼過ぎ。とんとん拍子で深夜零時に現場入りして虫取りをしようという話になりました。私は虫というより自然の中にいるのが好きなだけなのですが、まぁ流れで行くことになりました。高速バスで駅前について、若干歩いてコンビニでエナジードリンクを買いました。深夜にバックパック背負って、ヘッドライト着けて、カラフルなジャンパー着たよくわからん奴らがエナドリだけ買って出てく。まぁ見るからに登山客ですが、虫網背負ってますから、店員からすれば、ただの変な奴らです。最も、そこまで他人に興味のある人間はあまりいないものですが。

あの時期あの時間帯に山に入るときに気を付けるべきことは一つ。熊です。森のくまさんなんてかわいいもんじゃありません。出会えば最後、後は神頼み。仏に助けられるか、自分が仏になるか。冗談じゃないわけです。コンクリで固められた道が徐々に枯葉で埋められていく。足に伝わる感覚もだんだん柔らかくなっていく。静かな森の中には四人がわざと声を張って明るくしゃべる声だけが響く。虫好きの集まりですから、山やら林やらの歩き方はある程度心得ています。しかしながら、いくら気を付けていても出会うときは出会います。各々が若干ビビッているのが伝わってきました。自然というのはいいものです。五感のすべてを満たすことができる。田舎からかのコンクリートジャングルに出てきた私にとってはより特別なものです。小さなころから自然に足を踏み入れ、今の私の人生を形作っているといっても過言ではありません。その中でも特に私が好んでいるのは音です。町というのは何かこう無機質な音にあふれている。自然の中に一度踏み入れば、土や落ち葉、枝を踏む音、木の葉の揺れる音、野鳥の鳴き声が聞こえる。まぁ第一に都会の音が無機質であるというのも、凝り固まった視点からのものであるので、よさを見つけられていないだけなのかもしれませんが。音によっては深夜の森の中という状況も、明るいもの、怖いもの、ちんけなものにもなるわけです。私はそういう意味で音を愛したい。少し森を進んだあたりで奥の方から何かが枝葉を踏み歩く音がしました。三人が身構える。そこを照らすと、ミヤマクワガタを片手に持って、「ライトの電池切れたわ」といっている友人がたっていました。

夜も更けて 木を見上げつつ 星を見る 友の目映るは クワガタのみか

樒倉



ご感想はこちらまで！

Twitter（現X）ハッシュタグ

#うたそら

「うたそら」では Twitter（現X）でのご感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

今号のうたそら

2026. November No. 35

参加歌人様　41名
連作欄　27名
テーマ詠欄　34名
一首評　7名

リレーコラム 望遠鏡　渓響 さん
リレーエッセイ いちごいちえ　樒倉 さん



短歌募集

くわしくはこちらから

2027. No. 36　〆切 '26 12/31（木）24時

8首の連作	テーマ詠「淡」1首	一首評「そらよみ」

2027. No. 37　〆切 '27 2/28（日）24時　6周年!!

8首の連作	テーマ詠「6」1首	一首評「そらよみ」

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
http://kohagiuta.com/utasora/

編集後記

木々の葉も色づき、秋も深まってまいりました。朝晩は冷え込む日も増えていますので、皆さまどうぞ暖かくしてお過ごしください。わたしは10月、引きこもっている日が多かったので、11月はもう少しあちこち出かけて、いろいろな景色に出会えたらと思っています。

さて、今号もたくさんの素敵な歌をお寄せいただき、ありがとうございました。テーマ詠「静」には、さまざまな静けさを詠んだ歌が集まりました。どうぞお楽しみください。

次号の締切は12月末（大晦日）、発行は来年1月初旬です。テーマは「淡」。皆さまのご投稿をお待ちしております。

編集鳥　千原こはぎ

うたそら　第35号
発行：2026.11.01
編集・制作：千原こはぎ
@kohagi_tw　http://kohagiuta.com/utasora/